

I. 教 職 員 の 部



あの日の学校は

前教頭 長谷川 殖

「ドン」という不気味な地鳴りと激しい家屋の揺れに跳び起きた。だが、住まいは損傷もなく近隣も静かであったので、校長から電話があるまではそれ程の地震とは思っていなかった。

「今朝の激しい地震で住まいに大きな被害がでた。校舎等の被害が気になる。私は校舎を調べに行くので、あなたは第二運動場を調べて後、校舎に来てもらいたい」とのこと。

早速、第二運動場に近い増田教諭に応援を頼み、運動場に駆けつけた。やがて荒木・瀬田・石倉教諭、津本管理員も顔を見せた。手分けして被害調べにかかった。

○自彊館 建物には異常はないようだ。事務室・クラブ部室への出入口あたりでガス洩れがある。ガス会社に連絡したところ早急に修理に来校される。他に異常はないようである。

○上段のグラウンドの地表に巾約5 cm、長さ10数メートルの地割れが2条あるが、他に異常なし。

○下段グラウンドの西よりに数条の長い地割れがあるが大したことはないようだ。第二運動場の北及び西の斜面が崩れていないかと心配していたが無事で一安心。他にグラウンドには異常なし。

○体育館 入口付近が水浸し。階段を流れ落ち、二階から水滴がしたたれ落ちている。水源は二階の消火水槽で、穴があいて水が勢いよく吹き出している。直ちに全員、バケツと雑巾で排水と浸水拡大防止の作業を始めた。館内を点検すると屋根と鉄骨柱の接合部分に透き間が3か所できており、塗装壁の剥落もある。他に異常はない。

第二運動場の状況が分かったので、後は増田教諭他に頼み、荒木教諭と気になる校舎に向かった。丸山経由で五位ノ池山麓線あたりに出ると、全・半壊の家家が目につきだし、次第にその数もふえて来る。西代から新長田にかけての一带は木造家屋がほとんど倒壊または大きく傾き、あちこちから黒煙が立ち上がり炎の渦巻いている所もある。そういう中に崩壊したり傾斜しているビルディングが無残な姿をさらしている。戦時中の神戸大空襲を再現したような惨たんたる場景である。改めて奇想天外の大地震の恐ろしさを実感した。

車の渋滞もなく悲愴な状況に胸打れながら学校に到着。玄関より東のブロック塀が歩道に倒壊はしているが、校舎の窓ガラスは割れておらず、一見したところ建物には被害僅少で救われたと思うた。ところが一歩玄関に入った途端、「これは一体どうなっているんだ」とがく然とした。

初代校長の胸像が転げ落ち、校長室・職員室への廊下が見当たらない。よく見ると一階部分が押しつぶされ、二階の廊下が目の高さにずり落ちて教室が見える。驚いて運動場に出て見ると押しつ

ぶれた一階に、二階から上の部分がどっかりと居座った格好になっている。これは大変なことだと悲痛な思いで全校舎を点検してまわった。

○西校舎 一階が押しつぶされた西校舎は天井が職員室の上に迫っていて薄暗く、中の様子がよく見えない。校長室・事務室は入口がつぶされ、いつまた強い余震が来るやも知れず立入ることは出来ない。北校舎との境目にある便所と階段の所で、屋上から一階までV字型にザクッと裂けている。各階ともに北校舎の階より約2mずれ落ち、立入ることが出来ない。

当日、宿直であった山科管理員は平常通り起床し、部屋を出ようとした時にグラッと来て一瞬にがれきの中に閉じ込められた。幸いに怪我もなく暗がりの中をようやく奇跡の脱出をしたという。

○北校舎 国道沿いの北校舎は各階とも、東便所の柱部分に亀裂が上下に走り、一部壁面が剥落している。幼稚園舎の上の講堂と屋上の二か所に架けた渡り廊下と北校舎とのつなぎ目が外れる寸前の状態になっている。各階の教室・廊下は、机・腰掛・諸用品が散乱し、壁面に亀裂がある教室もある。特に一階では散乱の状態は甚しく、靴箱やそうじ用具箱が倒れたり跳び出したりして、ほとんどの靴が廊下に散り足の踏み場もないめちゃくちゃの状態となっている。この状態は上階に行くほど静まっていた。

購買室・食堂も言うに及ばず、手のつけようもない散乱状態である。

○幼稚園舎・講堂 建物が少し南に傾き、タイル張りの熊の親子の壁画は無残にも大小無数の亀裂が走り、タイルがかけ落ちて穴があいている所もある。一階の運動場側のガラス戸はこわれ、机が飛び出ている。どうにかに倒壊は免れたという感じである。職員室の背丈けのあるあの重いどっしりとした耐火金庫が机に倒れかかり、戸棚は倒れ、引出しは跳び出し、諸物品・紙類が飛び散って落花生うぜきの状態で足元に気をつけながら園舎に入った。二階・講堂はこれ程までの被害はないようである。

○特別教室棟 外見は異常がないようだが入って見て「ここも被害甚大だぞ」と思った。二階家庭科室の食器類が戸棚から跳び出し碎け散っているし、固定されていない物品・用具が倒れたり放り出されたりしている。三階情報処理室・コンピュータ室の機器は台上から落下しているものと落下していないものがあるが、どれもこれもが損傷しているようだ。四階のワープロ室は、三階とは打って変わってワープロが台上に座っているのは極少で、百余台のほとんどが付属器具ともに床に転がっている。ここも足の踏み場もない状況。百余台の機器が整然と並び、連続全国優勝してワープロの神女商と名をさせた技能修練の教場なのかと悲痛な思いがした。

教教室も散乱甚しく、扉に物がつかえているのか入ることが出来なかった。

午前10時頃、大正筋商店街で黒煙が上っていたのがいつの間にか猛火となり、運動場南側の民家に迫って来た。町内自衛消防団から消火ホースを貸してくれとのこと。直ちに北校舎一階東の消火ホースを運動場に延ばし、水栓を開けると勢いよく水がほと走った。民家に水がとどくように更にホースを数本継ぎたした。ところが、いざ開栓してみると一滴の水も出ない。駆けつけた町民の方々

に各教室のバケツを運動場に放り出し、校長以下来校の職員約10名も加わり、西門際の「もやし屋」の井戸水を汲み、火の粉を浴びながらのバケツリレーで消火に奮闘した。しかし残念ながら猛火には雀の涙のバケツリレー。火勢はひるまず類焼につぐ類焼でなすすべもない。住民の方々は永年住み慣れたわが家の焼け崩れていくのを茫然と見ているだけである。消火栓が全く役立たなかったことが悔やまれてならない。

今回の大地震が生徒の登校中におきていたらどんな大惨事となっていたらうか。思うだけでも背筋に寒気が走る。地震・津波・暴風雨・火山活動等の天災を皆無にすることは不可能としても、極力被害を阻止する方途を平素より構じておかねばならないとの常識を身にしみて痛感した。

このたびの夢想だにしなかった大地震での教訓を今後に生かし、再び天を恨むようなことがあってはならない。

あとになったが、不幸にして亡くなられた2名の生徒および保護者や家族で亡くなられた方々の御霊に対し、ご冥福を祈ります。



地震と体験学習

教 頭 野 垣 重 行

最近義務教育を中心に、体験学習が盛んである。例えば、兵庫県教育委員会が小学校を中心に推進している五泊六日の体験学習があげられよう。都会から、親元から離れ自然の山野での体験学習は、現在の教育の激しい受験競争からくる、知育偏向・偏差値重視といった反省すべき教育課題から生まれた、一つの教育形態といえないだろうか。この教育では教室で得難い価値が期待されている。大自然の中での深夜の天空の星座から、せせらぎの小魚・草木から、小さな生命の存在・宇宙の神秘に気づき自然への畏敬、自然との共存意識の芽生え等が、さらには同年令集団の共同生活の中から、共同社会・共存意識の高まりは期待できないだろうか。こういった何か新鮮な価値を求めて自然体験学習が広がっていると思える。

一般的に教育の現場でいう自然体験学習は指導者側が緻密に計画立案し、ある一定の教育効果を予想・期待した中で実施される教育活動そのものと言えよう。一方、地震体験は、当然なこととはいえ、教育的配慮も教育効果も全く予想されていない突発的自然現象で、時には生命をも奪う危険をはらんだ強制的体験と言えよう。この意味で地震は人に心理的にも強い影響を及ぼしているので

はないかと推測される。

私は今回の大地震が、女子高校生にどのような影響を及ぼしたかに関心を抱いた。私の学校はまさに被災地の中心にあり、広い校区の生徒の家庭も大きな被害を被った。家が倒壊し避難所生活を余儀なくされたといった生活そのものの変容にとどまらず、心理的に及ぼした影響を探るために、全生徒（1,474名）を対象にアンケートを試みた。まず本校生徒の被災状況の概要を述べる。生徒の死亡2名 全半壊家庭数361（24.5％） 全半壊家庭数10 避難生活体験者数（公共の避難所・親戚等）539名（36.7％）また学校自体は倒壊し生徒は長期にわたる家庭待機を経験し、現在は別の地の仮設校舎で学習している。

地震が影響したと思われる意識の変化はどうか。「設問－地震後、あなたの考え方で変化があれば書いて下さい（◎は頻度の高い回答）」

① 人間関係についての意識の変化

◎家族の大切さが分かった。◎人の優しさが分かった。◎思いやりの大切さを知った。◎若い人たちがすごく働いて素晴らしかった。◎助け合える社会になってほしい。◎ボランティア活動福祉に関心を持つようになった。○避難所で個人の力のなさを痛感した。○人を外見だけで判断しなくなった。○老人の一人暮らしは心配。

地震体験を通して、人は一人では生きてはいけない、共に協力することにより社会が成立していることを、家族関係の中から近隣との接触から学びとったと言えないだろうか。

② 自然災害に対する意識の高まり

◎災害に対しての備えが不十分。◎地震に負けない街をつくりたい。◎屋根は瓦でない方がいい。◎耐震性建築が必要。

今回の大地震は、地震に対して生徒の目を覚まさせた。無残な屋根瓦、阪神高速道路の倒壊、古い家並みの壊滅的打撃、さらに神戸を襲った大火災と手こずった消火活動、これらは生徒の脳裏に焼き付き「地震に負けない街を」と自然災害に対する意識を高めたと言えよう。

③ 自然に対する畏敬の念の深まり

◎自然の恐ろしさを知った。◎人は自然に対して無力だ。◎命の大切さ、重さを知った。○人の命のはかなさを知った。○生きることの素晴らしさを知った。○自然を大切にし、人間の好き勝手にしてはいけない。

死に直面する体験は、当然のこととして自然に対する関心を高めるとともに、人知を越えた神秘感・畏敬心を深める絶好の学習場面だったとは言えないか。自分の周辺で身内の、隣人の死を目撃するという異様な体験は、人の死に対する認識に影響を及ぼしていないだろうか。命の重さを認識する一方で、命のはかなさを思うという回答を、教育に携わる者はいかに受けとめるべきか。

④ 社会生活に対する見方

◎ライフラインの大切さが身にしみた。◎交通機関の有り難さが分かった。○仮設住宅に住む

老人のことを考えるようになった。

地震直後、ライフライン、代替バス、仮設住宅、救援物資等平常時にはあまり使用されない表現が街に氾濫した。これらは、社会生活を別の角度から観察させ、社会生活への認識を高めたと思われる。また自分自身がボランティア活動に参加することにより社会的弱者に対する関心も高まっている。（本校のボランティア参加経験者は、148名）

地震体験からの行動の変化はどうか。地震の恐怖からの一時的な変化、時にはその変化が習慣化されることは考えられないか。ここでは地震5か月後の日常的行動が、地震前と変化していないかに限定して考察する。

地震が影響したと思われる行動の変化。

「設問－地震後あなたの生活習慣の中で変わったことがあれば書いて下さい」

① 地震に対する備えからの行動

◎非常持ち出しバッグを枕元に置いて寝る。（ラジオ、懐中電灯、非常食等）◎高い所には物を置かなくなった。◎水道・ガスは点検してから寝るようになった。○非常時のことで家族で話し合うようになった。○風呂の水をいつも張っている。○ペットボトルを常においている。

これらの行動が継続される保障はないが、将来家庭の主婦として、地震等自然災害に対する備えとしての行動、例えば非常持ち出しの用意、ガスの点検等の習慣化は期待されないだろうか。

② 人間関係についての行動

◎家族の話し合いが増えた。○前よりお手伝いをするようになった。○他人の心配ができるようになった。○近所の人にあいさつができるようになった。

家族内での相互の行動変化がうかがえる。日々平穏な生活から一転し、今日一日の生活が脅かされるという非常時の生活の中から、家族間の協力態勢の確立、仕事の分担、非常時の行動等についての対話など好ましい変化の一端が推測される。また、救援物資の分配や避難所生活での体験からであろうか、近隣関係との結びつきの改善が読み取れる。

③ 物に対する認識からの行動

現代社会は、「豊かな時代」といわれ「もったいない」という語は若者にはあまり通用しない。突然襲った地震は、一時的であれ欠乏の社会の体験・共存のための相互協力・分配の生活を経験させた。「水や物を大切にようになった」との代表的回答から、物を大切に、分かち合うという人間行動の基本を期待したい。

地震が女子高校生に及ぼしたと思われる影響の一部を意識・行動の面から見てきたが、それは単に外見上に止まらず、心の奥まで深く浸透しているのではあるまいか。特に、この心理的影響は低年齢程強く、ときには社会的適応にも問題が生じているのではと懸念される。

人

野 垣 重 行

時は、1995年1月17日、5時46分。

ドーン、ガタガタ ガタガタ

パターン ガチャーン

一瞬にして暗闇。

「おい、大丈夫か」

大丈夫と応える。

手を取り合って妻を見る、
うつろな目を。

街を自転車で走る。

蜘蛛の巣のように張ったホース、

ペチャンコのホースを踏んで。

ビルの下敷きになった乗用車、

窓から炎と黒煙をあげるビル、

道いっばいに倒壊した家、家。

背中が熱い。

消防車、救急車、パトカーの警笛が

街中に共鳴する。

破壊へ一直線。

自然の怒りか、神の怒りか。

焼け跡の瓦礫を歩く。

「一家無事 ○○へ」のダンボール一枚が、

グラス半分の水と、花一輪が、

涙を呼ぶ。

傾いた立ち入り禁止の校舎に、

おそろおそろ入ってみる。

不気味。

一階が完全に押し潰され、

コンクリートの塊がぶら下がっている。

給水車に群がる人、人、

スコップを片手に走り去る自衛隊、

刻々と増える死者。

亡くなった知人の名前がテレビに、

テレビ、ラジオは地震一色。

福岡の、名古屋の、東京の車が走る。

バイクが蠅のように飛び交う。

電話はかからない。

電車も走らない。

電気も、水も、ガスも、

老女が腰に手をあてがい天を仰ぐ。

虚脱。

巨大な鋼鉄のかまきりが、

ビルを噛み砕き、鉄筋を引きちぎる。

瓦礫、廃材のトラックが列をなし、

うつむきかげんの白いマスクと

黒いリュックが街を行き交う。

テントとワンボックスカーの炊き出しが、

人のぬくもりを呼ぶ。

やがて、

仮設のうどん屋が店を開いた。

赤、青、白の散髪屋の標識が回りだした。

電気がついた、

水が出た。

やっとガスもきた。

歓喜。

人の息吹を見る。

でも、

いつ公園のテント張りはなくなるのか。

あれから六か月、

校庭のもじずり草が咲いた。

生徒たちは汗をかき仮設校舎へ。

破壊の中に生命を見る。

人は、

自然の中でのみ、神の手のひらでのみ、

永遠に生き続ける。



神話の崩壊

進路指導部長 橋本博文

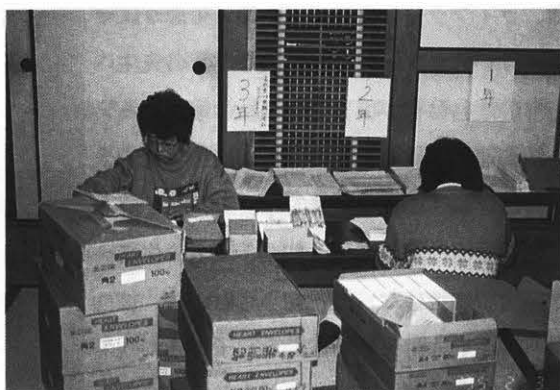
平成7年1月17日、午前5時46分、「神戸は地震のない都市、天災の少ない町」という神話が一挙に崩壊した瞬間であった。鉄筋校舎のわが校があんなにもろく崩れてしまうとは全く想像を絶するものだったし、地震というものの底知れぬ恐ろしさを目の前にして、全く言葉を失ってしまったものだった。あれから早や8か月、なんとか当時を回想するゆとりもでき始めたこの頃である。

本校の本拠が第二運動場の自彊館に移り、進路指導部としての活動を再開したのは地震の数日後だった。私の記録によれば、1月25日に某事業所の取締役の方が訪ねて来られ、採用内定していた2名の生徒の内定取消しを通告されている。初めての内定取消しであった。以後12名の生徒が内定を取り消され、15名の生徒が採用延期の通知を受けることになる。

このような採用取消しや事業所からのお見舞いに対する応接もさることながら、進路指導部として先ずしなければならないことは、学校の住所移転と電話番号の変更通知を各事業所に発送することであった。ところが、事業所一覧等の書類が全て崩壊した校舎に埋まってしまっており取り出せない。止むなく電話局へ行き、電話帳を繰って会社の住所を調べたりもした。しかし、その後、ある勇気ある先生が余震の続く中、決死の思いで座屈した校舎にもぐって書類を取り出してくれたお陰で急速に仕事かぶり、多くの職員の手助けもあって、計600通の通知を1月末日までに発送することができた。また多くの生徒が被災して避難所等に移ったため、事業所からの諸連絡がスムーズに伝えられず苦労したことも思い出の一つである。

昨年度も厳しい就職状況であったが、年が明け追加求人がぼつぼつ来始めた時ただけにその打撃は大きく、特に採用を取り消された生徒への対応には大いに頭を悩ました。しかし、幸いなことに、採用を取り消された生徒を対象に求人したいと申し出られる事業所もあり、地獄で仏に出会ったような嬉しい思いをしたことが忘れられない。

「天災は忘れた頃にやってくる」と言うが、忘れるも何もない。天災なんてこの地にはないんだと信じていたのにやって来た



天災。生きている地球の上に住んでいる我々には「絶対」ということはあり得ないのだということ、そして、改めて「諸行無常」を感得させられた厳しい体験であった。



M7.2の教訓

教務部長 池田 忠夫

悪夢の一瞬、平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部を襲ったマグニチュード7.2という大地震は生涯忘れることができないことでしょう。

その日、私は、通常通りに駅まで行きましたが、ホームには通勤客があふれ、事の重大さを知りました。テレビで見る神戸の街は一変し、悲惨な状況が次から次へと映し出されていました。早速、学校や教頭、同僚宅へ電話をかけるも全く通じず、私は学校へ子供の原付自転車で出勤することになりました。夕方になり、18日午後1時から運営委員会が行われるとの連絡が入りました。

18日午前10時頃に学校へ向かいましたが、道は渋滞し、思うように走れません。学校に近づくにつれ、その情景は悲惨で目を覆いたいほどで、あらためて天災の恐ろしさを痛感させられました。あまりにも豊かで平和そのものであった日本への警告であろうか。それにしてもむごすぎるのではないか。多くのことを考えているうちに学校に着きました。

運営委員会では校長先生のリーダーシップのもとに本部の設置、職員・生徒の安否確認、今後の事について協議されました。生徒達へは連絡があるまで自宅待機ということになり、まず担任を中心に生徒の安否確認に入りました。しかし通学範囲が広いうえに家屋の倒壊や焼失、避難所への避難、ライフラインの崩壊等もあって思うようにはいきませんでした。第2学年の先生方への連絡は私が引き受け、私の家に入る生徒の連絡等はその都度担任に連絡し、安否の確認は進んでいきました。

全校生徒の安否確認の結果、2名の生徒が震災の犠牲になったと知らされた時、彼女らの短い人生を想いながら、子を持つ親として自然と涙がこぼれ落ちました。ご冥



福をお祈りいたします。またこの地震直後から、日頃ご無沙汰している先輩、後輩、卒業生等知合いの多くの人々からお見舞いと励ましの電話をいただきました。被災地では、世界の多くの国から、また日本の多くの人達がボランティア活動を始めたり、救援物資が次々と送られてくる状況の中で、人間と人間のつながり、心と心の触れ合いの大切さを痛感いたしました。

生徒達も連絡があるまで自宅待機という指示に従っていましたが、長期間にわたるため生活習慣の乱れが心配で、決して乱れた生活をしないようにと心の中で祈っておりました。

この兵庫県南部に発生した大地震によって人と人、心と心の触れ合いの大切さ、ライフラインの破壊や交通機関の不通等による不便さを身をもって体験しました。同時にいつの時代であっても、コミュニケーションの大切さ、物を大切に扱う気持ち、5千5百人以上の犠牲者を思うとき、命の尊さなどが、心の奥深く刻み込まれました。そして、事故のない平和な時にこそ、様々な分野で、多くのことを考えなければならないことをあらためて教えられたような気がします。



生徒の安否確認

前生徒指導部次長

庶務部長 赤 浦 武

連休明けの平成7年1月17日（火）阪神・淡路地域を中心に大地震が起こった。生徒指導の係として、一日も早い全校生徒の安否確認を願っていた。

18日緊急の運営委員会が開かれ、学級担任によって、生徒の安否と家庭の被害状況を早急に把握してもらうこと、また学校校舎の被害状況と交通機関の状況から生徒は当分の間、自宅待機とすることを決めた。さらに明日出勤できる教職員を召集し職員会を開くことも決めた。

19日午後出勤可能な教職員が集まり、職員会が開かれた。出勤の教職員には家屋の全半壊はあるが教職員及びその家族全員の安否が確認された。出勤できない教職員については、学年の連絡網で連絡することにし、学級担任は、生徒の安否を確認すると共に家族や家庭の被害状況を調べることとした。なお、学校の管理棟が倒壊しているため学校本部を第二運動場の自彊館に置くこととし、明日から連絡や問い合わせは全て本部で行うことになった。このため本部に日直を置き、対応することになった。

職員室、事務室が倒壊し、生徒の資料が埋もれてしまったため、学級担任は連絡簿や手元にある住所録を基にして連絡することになった。電話回線が混雑しているため、生徒宅への連絡は早朝か

夜遅くでないと電話がかかりにくい状態が続いた。私の場合も早朝6時頃から、夜は11時頃からの時間帯を利用したり、比較的にかかりやすい公衆電話を利用したりして、名簿に従い確認を取っていった。次、次と確認がとれ、家族全員無事の報告を受けると「ホッ」とした。また、親が電話口に出て、学校復興に頑張ってくださいと励ましの言葉をかけられることもあった。生徒の安否確認が続けられる一方で、教職員が出勤し、倒壊した長田の校舎の後片付けが始まった。

1月26日第二運動場の自彊館で午前中各学年の打合せ会で生徒の状況報告がまとめられた。この時点で、1年生で1名、3年生で1名、全校生徒の中で2名の死亡が判明した。また、各学年の所在不明者が1年生20名、2年生6名、3年生13名の計39名あった。午後の職員会で、早急にこの39名の安否確認をお願いし、教職員が手分けをして避難所を訪問確認し、印刷物（資料）の掲示をする。所在不明の場合は、可能な限り家庭訪問をし、状況を把握して報告してもらうことになった。先生方の通勤状況を考慮して、訪問先を神戸市内9区分、その他の地域を芦屋、西宮、伊丹、宝塚、尼崎、加古川、淡路の7地域に分け人員の割り振りを行うと共に、避難所一覧表を各市、各区にお願いし、ファックスで送ってもらった。

1月27・28日中に訪問し、避難所や駅に印刷物を掲示してもらい、その結果を報告してもらうことになった。この結果1年生20名中18名、2年生6名中2名、3年生13名中13名の計33名の所在と安否が確認され、残り不明者は1年生2名、2年生4名の計6名となった。この残りの不明者も先生方の努力により、2月の初めに全員の所在と安否が確認された。

学校の中核機能の職員室、事務室等の倒壊により生徒関係の資料がほとんど手に入らない状態のため、生徒の所在、安否の確認作業が大変手間取ったが、先生方の協力と努力により生徒全員の安否と所在の確認が完了した。

全員の無事を祈っていたが、残念ながら2名の尊い命が失われた。また、家族に死亡や負傷者があり、家屋の全壊、半壊の被害を受けている生徒が多くいた。

最後に、亡くなった生徒の冥福を祈ると共に、被災した生徒・保護者の方々の復興と学校の再建を祈り、筆を置きます。



神戸女子商業高校の生徒の皆さんへ

生徒の皆さんは学校の指示があるまでしばらく待機してください。

授業の1日も早い再開については先生方が力を合わせて努力しております。必ず連絡しますので安心して健康に留意して過ごして下さい。

なお、学校へ未連絡の生徒は至急下記に連絡して下さい。

今後、NHK・サンテレビ・AM神戸・新聞等を通して連絡しますから注意して見て下さい。

連 絡 先

神戸女子商業高校第二運動場

〒654-01

神戸市須磨区緑が丘1丁目12-1

TEL 078-741-1860

FAX 078-741-6304



その時・私は…

第二学年主任 大 歳 哲 司

1月17日（火）・5時30分起床。毎朝の行動で湯沸かしのためガスに火をつける。洗面に行く。それを終えて移動しかけたところで、あの震災に遭遇した。歩けない、廊下の壁に両手を広げている。腰が抜けたようにへたり込む。生まれて初めての体験だ。這ようにトイレに飛び込む。「ガチャ」「ガチャ」「ドサー」と、とんでもない音が聞こえてくる。イヤな予感。どうしよう、何をすべきか？頭の中でグルグル廻る。そうだ!!火をつけていた。（以下行動の順を書き印す）

- ①「大丈夫か」「大丈夫か」の声を張り上げていた。声が上ずっているのがわかる。突然の恐怖・興奮で腹に力が入らぬ。
- ②泳ぐように食堂を渡りガスの火を消しに行く。何事もなかったかのように火が燃えていた。こんなのでいいのか？でも、この火の明かったこと、いまだに目に焼き付いている。（停電だった）
- ③「津波は大丈夫か？」ラジオをつける。なんと震源地は淡路島と放送している。これは驚いた。地元で一里と離れていないではないか、淡路も名高くなるぞー。「津波発生せず」これが本当に一番の安心だった。
- ④外に出る。ガスボンベが倒れてないか点検するために。ついで隣のガスボンベも確認、ちゃんと立っていた。ホット胸をなでおろす。夜が明けてきた。不安も薄れてきた。
- ⑤近くに一人住まいのおばさんがいた。そうだ声をかけてあげよう。小走りに行って外から「おばさん、大丈夫か」「有難う先生、大丈夫よ、でもこわかった」、あとで知ることになるがこの声かけでどれだけ元気づけられたかー。

ひと声かけ合う大切さ、仲間づくりの大事さを知ることになった。

- ⑥台所、書斎の惨事を写真に撮るが、何故かかたずける気が起こらず少し放心状態にある。余震がくる。余震があるとニュースが伝える。家のまわりは液状化による砂の噴出。あっという間にどうしてこれだけの砂が湧き出するのか、これも記録に収める。

職場は大惨事。この震災で一番被害の大きかった学校になってしまった。当時の学年（高一）の生徒が一名圧死というかたちで犠牲になった。担任の先生と何度か避難所を訪問するが、まったく言葉がない、つらいことであった。

震災後、荷物の運び出し等、色々な仕事が目白押しであったが、毎日一時間でもいいから学年で集まってワイワイガヤガヤと議論の場を持ちたかった。その中から生まれる連帯感や共通理解、方

向づけ…。それが出来得なかった。“集まって語ろう”という声かけができず、その行動・実行力がなかったのが本当に惜まれる。私として悔やまれてならないことであった。

震災は、自己が試される。恰も弱い所を指摘してあぶり出してしまうものであった。



回 想

前教務部長 前 切 秋 夫

夢想だにしなかった阪神・淡路大震災に遭遇し、日頃の危機管理に対する認識の甘さを痛感した。震災直後から学校年度終了の3月末日まで教務部長として微力ながら教務事務に取り組んだアウトラインを述べたい。

震災後に開かれた運営委員会で、①生徒・職員の安否確認と被災状況調査②校舎の被災状況と今後の対策③緑が丘校地に仮設校舎の建設など今後の方向づけが示された。

そこで教務では次の5項目について、次のように取り組んだ。

1. 生徒登校日の設定について

生徒の被災状況の適確な把握、学校の被災状況と今後の学習活動について説明するため、生徒登校日を設定した。交通機関・被災生徒のライフラインの復旧状況などを考慮して学年毎に2月第2・第4週の火曜日午後1時は1年生、同水曜日午後1時は2年生、同木曜日午後1時は3年生と2回の登校日を設け、当時第二運動場とっていた妙法寺の緑が丘校地の講堂兼体育館で、学校長・学年主任・係の話など約1時間位で終了するようにした。また、学習のおくれを取りもどすため、学習プリントの配付をした。

2. 授業再開について

交通機関の復旧状況、仮設校舎建設の進捗状況、被災生徒のメンタル面の安定度や学用品の整備状況、授業時間割編成の進捗状況（施設・設備が必要な実技・実習科目を削減し、週33授業時間を24授業時間に組み替え）などを考慮し、3月1日（水）からの授業再開をめざし準備を進めてきたが、地元住民との話し合いなどで仮設校舎の建設がおくれ、3月3日（金）から授業を再開した。授業はプリントを中心とした学習を30分授業で4校時まで（始業10時30分、終業14時30分）とした。また、学習のおくれを取りもどすため、震災前、休業日となっていた第2土曜日にも授業を行い、修業式を3月29日（水）とした。なお、各教科・科目の最終授業時間には確認テストを実施して学年

成績の参考資料とした。

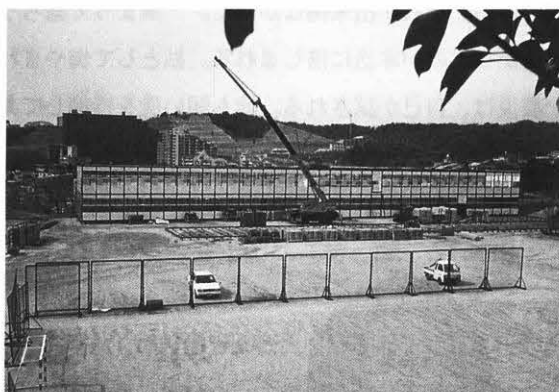
3. 卒業・進級について

(1) 3年生

行事予定では学年末考査は1月27日(金)～2月1日(水)・卒業式は2月22日(水)となっていたが、震災のため、学年末考査は実施できなかった。

学年成績は、1、2学期評価点の平均とした。また、年間授業日数は、1、2

学期の授業日数に3学期は震災前の5日間と震災後の学年登校日、卒業式関係の4日間を加算した日数とした。これらの成績処理などはすべて学級担任が行った。なお、各種表彰は規定通り行い、卒業式は2月28日(火)に挙行了した。



(2) 1・2年生

学年末考査は実施できなかった。学年評定は1、2学期の評価点の平均をメインに3学期に行った確認テストの結果も参考にした。また、年間授業日数は1、2学期の授業日数に、3学期は震災前の5日間と2月の学年登校日、卒業式関係の行事日、授業再開の3月3日(金)以降修業式までとした。これらの成績処理などはすべて学級担任が行った。なお、進級・各種表彰については規定通りに行い、成績・出欠不良者には規定通りの指導を行った。

4. 教務関係書類の搬出について

①生徒指導要録②学業成績関係表簿特に平成6年度1、2学期成績一覧表・欠課時数一覧表③生徒指導資料④生徒出席簿⑤各教科・科目の定期考査問題ファイルなどの重要書類は搬出困難な状況であったが、義務感と責任感から先生方の協力を得ながら、大部分を無事搬出できたことは幸いであった。

5. 各種検定試験について

この1年間の学習のしめくりである主要な各種検定試験(簿記・情報処理・商業経済・販売士・珠算など)が受験場である本校校舎が震災で損壊したため実施できず、検定合格をめざして努力してきた生徒の気持ちを考えると非常に残念であった。3年生については再受験の機会がないので、受験者を調査して卒業式までに検定受験料を返金し、1、2年生については4月中旬頃に再受験の機会が設けられるとの全商検定本部から連絡があり、検定受験料はそのまま預りとした。

この他、授業再開については、激震地区居住生徒・保護者と軽震地区居住生徒・保護者との間に震災の被害に対する認識のギャップが大きく、その間の調査に苦労したこと。被災便乗転学希望生徒・保護者の対応に苦慮したこと。電話がかかりにくく情報不足に悩まされたことなど種々の問題があった。

終わりに、今回の震災で感じたことは、高度の文明社会は天災の前には如何に無力であるかということである。一面の焼け野原、全半壊したビル・家屋群、ライフライン・通信・交通網の寸断など、丁度、50年前の戦災に遭った姿の再現を見た思いがし、物資不足に苦しんだ当時の記憶がよみがえり何ともいえないやりきれない気持ちになった。

また、長年馴れ親しんだ校舎の無残な姿を見たとき、一瞬、力が抜けると同時に熊見正男学園長の面影が浮かび、涙を禁じ得なかった。

ただ、不幸中の幸いといえるのは今回の震災が早朝に発生したことである。もし授業中に発生していたらと思うと慄然とする。

「災転じて福となす」環境に恵まれたこの緑が丘の地に、更にすばらしい教育施設・設備の校舎が再建される。一日も早い再建の日を楽しみにしている。



今年の修学旅行

第3学年主任 辻 清 隆

3年生の配属になれば、まず最初に取り組む行事が修学旅行である。今年度は、当たり前準備、企画していた過去の心構えとずいぶん違っていた。

阪神・淡路大震災から約3か月経ち、仮設校舎は建ち授業再開までこぎつけたものの、公共交通機関の復旧作業はまだ続いており、住む家をなくした生徒のケアも十分でない。こうした震災後の問題をかかえている中で、新年度がスタートしてしまったのである。

今年の修学旅行を行うか否かは震災後から職員間で話題になっていた。他の行事に比べ、多額の費用がかかるため、この時期に保護者へ多大な負担がかかることが、一番気になる点であった。検討の結果、震災に屈することなく、予定通り3年生の学校行事として取り組んでいく方針に決まった。早速、新年度の始業式に、保護者あてに本年度修学旅行の主旨のプリントを配布し、学校の意向を伝えた。

不参加は20名と、例年に比べ倍近くの数であったが、幸い保護者からの苦情、疑問の声はなく、修学旅行を実施することにご理解を得たと判断し、5月7日の出発に至った。

神戸から寝台列車で約20時間の長旅である。北海道の第一歩は、晴天に恵まれた函館山からの素晴らしいパノラマ展望であった。この日の宿泊地である洞爺湖温泉では、地元の観光協会より盛大

な歓迎のセレモニーを受けた。阪神・淡路大震災後、阪神間からこの地に訪れた最初の団体ということで、新聞社のインタビューやテレビの中継など思いもよらぬ歓待ぶりに驚かされた。

この宿泊地をはじめとして、翌日の十勝川温泉、川湯温泉、層雲峡、最終日の札幌まで行く旅先でお見舞いの挨拶と慰労の手厚いもてなしを受け、その度に私たち一行はたいへん勇気づけられた。

とくに印象深かったのは、出発して5日目の見学地である網走の天都山の出来事である。地元の網走高等学校の皆さんから義援金と花束を代表の方よりいただき、また、この日のために、観光協会の協力で、冬の寒夜のオホーツク海の流氷に『こうべファイト』の絵文字を刻み、パネル写真にして私たちに激励の言葉とともに贈呈していただいたことである。

ずれ落ちた瓦ぶきの屋根にシートをかぶせたままの家並み、鉄骨がむきだしになったままのマンション、廃材を積んだトラックが往来するほこりっぽい道路など登下校する生徒たちが見る神戸の風景は、震災の傷跡のすさまじさばかりだった。対照的に、どこまで走ってもまっすぐ続く広々とした道路、車窓からは牛や馬がのんびりとたわむれた光景が目に入り、透き通った摩周の湖水は、私たちに暫しの安らぎを与えてくれた。

たった1週間ではあるが、被災地を離れることで、新たな発見があり、多くを学んだ。

第一に、遠く離れた北海道でも、いまだ、阪神・淡路大震災に関心が強く、温かい心遣いに接することができ、私たちはたいへん元気づけられた。第二に、生徒たちの修学旅行に対する意識が日を追うごとに、変わってきた。生徒の表情に笑顔が戻ってきた。挨拶や応対の声にもはつらつとした覇気がでてきた。ある生徒に、買ったお土産の話を聞くと、「私のお土産は、テレホンカード1枚だけです。後のお土産は、家族、親戚と震災の時から避難所で一緒に住んでいるお世話になった近所の方の分です」という返事が返ってきた。

わが家がつぶれても、修学旅行へ行かせてくれた両親への感謝とお世話になった人たちへの篤い思いが、彼女の持っている土産袋いっぱい詰まっていたのである。

北海道に来て良かった。修学旅行を実施して良かった。生徒たちは、身をもって意義ある旅行を修学したように思う。

おわりに、網走で生徒一人ひとりに手渡されたパネル写真に添えられた詩をここに紹介したい。

ち・か・ら
あなたには
きらきら光る感性がある
夢みる力と 愛する力が
みなぎっている
美しい都の
感性と誇りをささえつづける

みずみずしい力だ

あなたの魂の一部に躍動していた

街が 傷ついた

そのことで あなたは今

あなた自身の神戸を

見い出そうとしている

あの日以来 神戸は

人間の愛と希望を象徴する街

となった

神戸再生のために あなた自身の力が

必要だということ そして

渇きをいやす慈雨のように

神戸がそれを待っているということを

今 あなたは

感じはじめています。



網走・わすれな草・神戸



あの日からの三日間 ～防災教育と「心のケア」～

第3学年副主任 浦井 康 晴

はじめに

あの震災から1年が過ぎようとしている。先日、神戸新聞に震災孤児のアンケート調査が報告されていた。今なお、9割が恐怖から不安を訴え「胸がドキドキし手足がしびれたり、夜になるとこわい」と回答している。また生き残った親に対し、「いらいらしている」と判断し、家族の経済状態に不安を感じている子供が3割近くいる。また今も地震のことを思い出したり、話すのはいやだと答えている。（あしなが育英会調査）「地震を思い出す子供ほど話すことや、ふれられること

をいやがる傾向にあり、さまざまな思いを心の中にためこんでいるようである」と報告は結ばれていた。同じ紙面に、“被災地の子供達を招待”とか“神戸を勇気づけるチャリティーコンサート”などのイベント開催が写真入りで紹介されている。マスコミを中心とする、被災者への社会全体の対応ぶりが問題とされながらも時は過ぎた。

1月17日

わずか20秒ほどの揺れは、兵庫区のマンション（11階建ての10階、築12年）に住む私にとって、その体験は、言葉では表現できないものであった。家財はすべて倒れ、重量180kg近くあるピアノでさえ足払いされたかのようにおお向けに倒れた。普段から神戸には地震がないと思っていただけに（なんの根拠もなく）マンション内のガス爆発としか思えず暗い部屋の中で火元確認をした。倒れた机の下から聞こえた子供の泣き声で、生きていることにまず安心した。子供は小学校2年生と3年生の2人で夜中に何回となく寝返りをうつおかげで、机の下にもぐりこんでいたことが幸いしていたようである。カーテンを開けて外の薄明りのなか電話をさがしたものの、通じるはずもない。まず避難口をと思い身体を2、3度ぶつけ、やっとの思いで玄関ドアを開け外に出た。



普段見なれた駅前の銀行も、木造家屋も倒れていた。街全体のあまりの静けさは、かえって不気味な雰囲気であった。余震のことを考えて湊川公園へ行くが、そこから見える上沢線の道路は凹凸が激しく信号機も倒れかけていた。上沢・松本通りから火の手があがり、兵庫大開小学校への避難をと考えてマンションに帰った。いつもならカーテンをあけるとよく見える新長田駅前のジョイプラザの高層ビルが、数十本の黒煙で見えない。リビングにころがっている、炊飯器の残りごはんを握りメシをつくり、毛布と子供の薬とぜんそく用の吸入器を持って階段を降りた。小学校へ向かう途中、顔見知りの人と目で挨拶をかわしながらも、目的地は同じ小学校であった。小学校の体育館は満員で二階の教室で寝場所のみを確保した。その夜、教室内で子供の泣き声や、老人のせきこむ声があちらこちらから聞こえてくる。発作と教室内のほこりやタバコの煙のせいで、娘のせきがとまらない。保健室で自家発電機からの電気を借りて吸入をする。頭に包帯を巻いた人や、タンカで運ばれてくる人で保健室は足の踏み場もないほどであった。懸命に動きまわる看護婦や救急隊の人達の左腕に巻かれた赤十字マークの腕章の“富山県”“京都府”“鳥取県”の文字が印象に残った。その日の救援物資はバナナと乾パンと牛乳であった。

1月18日

被災との共通項によって小学校との行動空間(地域・場所)で成立した集団は、組織関係・コミュ

ニケーション関係・心理関係の三点から人間関係が成立しつつあった。それはいつまで存続するかわからぬ利益的・共同的集団といえる。集団全体の利益をはかるための規範も、それにしたがう同調行動も成立しにくく、非統制的な群衆であり乱衆行動となりやすいものである。群衆の成員すべてが、地震の恐怖との共通項によりひとつのまとまりとなった。めいめいがその一体のなかにとけこんでしまうことで自我意識がうすくなり多数のなかの無名の一人との意識が強くなり（＝無名性）、社会生活をしている個人の責任感も弱くなる（＝無責任性）。このことは、多数のなかの一人として、罪悪感や罰の期待を弱める。この無名性と無責任性によって成立した群衆は、寝場所の確保や教室内の喫煙・ペットの持ちこみなどからケンカ口論やトラブルも発生した反面、上下関係よりも仲間としての意識が強くはたらき、親近感が深まり、遠慮のない気安さが生まれてきたのも事実であった。自然発生的に集団成員の集団意見として、群衆的意見が成立した。いわゆるデマ（流言）である。それは震災による集団的な欲求不満に由来する、不安・不満・恐怖のデマであった。

(1)近いうちに、もっと大きな地震がまたくる。(2)マンションや商店で空巣強盗が発生し、ドアに避難先のメモを貼っている家がねらわれている。(3)救援物資は小学校の避難所より中学校が優先される。(4)レイプ事件が多発している。(5)犬が野犬化し子供にかみつくので保健所が野犬狩りをするらしい。などを耳にした。このような噂話やデマは、時間が経過するにつれ、生まれては消えていった。その内容も震災時にまでさかのぼり、空に雷のような閃光を見た。飼犬が異常なほど夜通しほえ、前日に鳥が北に何百羽も飛んでいったなどと話されていた。近くの小売店の評判もまた耳にする。ポリ容器の値段を2倍にして売っているとか、腐ったバナナや苺を通常価格の倍で売っているなどがささやかれ、その家族に対して道徳的避難を浴びせる内容もあった。神戸に本社を置く大型量販店が、無料飲料水を配布するとの対応ぶりに、具体的に他のスーパーの名をあげて比較しながら称賛する。このような噂話やデマは、危機の渦中であって心理的な安定感をとりもどそうとする無意識な努力のあらわれかもしれない。しかしそのデマや噂話は、かくれた真実がふくまれている場合もある。そのような状況で大きなパニックやサディスティックなデマが流布しなかったのは、今回の震災が神戸市内でも南部に集中していることで、テレビ・ラジオなどの報道が迅速に正確に伝わっていたことは大きな要因と考えられる。しかし報道が“K O B E”のネームバリューにこだわるあまりか、その他の地域（明石・淡路・芦屋）の報道が少なかったように思われる。この日、娘が発作のため川崎病院に入院した。点滴と吸入で一夜を過ごしたが、病院内の公衆電話は長蛇の列であった。遺族の人の長距離電話や、留学生らしき人の英語や中国語での会話も聞こえた。連休中に観光旅行で神戸のホテルで被災した名古屋の家族の方が、車で20時間かけてきた。飲料水のペットボトルをかかえ、あてもなく市内の病院中を一つひとつ探しているとのことであった。テレビではヘリコプターからの空中撮影で、新長田駅前が映しだされていた。焼け野原で焦土と化した映像であったが、新長田校舎の白い新館（特別教室棟）が写しだされ安心したのを覚えている。

1月19日

避難所にいる時も、多くの卒業生と会うたび長田校舎のことを教えてくれる。その内容もそれぞれ違い「校舎は無事で、避難所になっている」「燃えてしまった」とか「倒れてしまった」…避難所での朝の配給後、自転車で学校まで向かった。途中、長田の菅原市場、JRの高架のくずれ、新長田周辺の焼け跡に驚きながらもペダルをこいだ。「校舎は無事であって欲しい」との願望は「校舎は無事だ」との確信へ変えていた。校舎が無事であるべきだと願い、それにこだわる自分自身を不思議に思いながらペダルをこいだ。道路の両側のマンションやビルの倒壊がひどければひどいほど、校舎の高さくらべながら校舎の無事を信じていた。国道2号線から見える校舎が倒れていない姿にうれしく感じた。そのうれしさと同時に、なぜ避難所になっていないのかと思いながらも東西校舎側へ向かった。職員室の倒壊ぶりにただ驚き、グラウンドに入り校庭のすべり台の上より校舎南を見た。昼食時によく利用した飲食店の人達が、ガレキから物をさがしている姿が見える。肩を落として座っている姿も見える。毎朝の交通指導で、いつも挨拶を交わしてくれ、笑顔で声をかけてくれるおばさんがいる。文化発表会の模擬店で、ジュースや焼きそばソースで世話になる酒店もない。ライオンズマンションのレンガの壁が黒いススで高い所までよごれていることが、火の恐怖を教えてくれていた。グラウンドのまん中にベンチを移動させ、リットル缶に木ギレをいれながら火をつけ暖をとる。「妙法寺に第二グラウンドがあってよかった。この長田の街も変わるだろう」そう思いながら火にあたる。職員が集まり臨時の職員会議が開かれ、本校の被災状況・現在の職員動静・生徒の安否確認……と新館2階の家庭科室での会議が続いた。作業の後、夕方避難所へ戻ったが、娘の熱が下がらずセキが続く。川崎病院では、主治医が来れず病室は急患で廊下までいっぱいであり、夜9時以降は停電で、人工透析用以外の水はないとのことととても受けいれてもらえる状態でない。幸い大阪の義兄が車で7時間かけてきてくれた。とりあえず、夜明けの車の規制緩和時に家内と子供達を連れて行ってもらうことにした。ライフラインの復旧のメドがたたず、小学校が避難所となり空気の悪さに余震の恐さとマンションが住める状態でないことと病院のようすなどを考え判断した結果であった。娘は大阪の総合病院に入院し、長男は仮転校届で次の週から元気に通学し始めた。被災地からの転校生ということもあり、学校全体で温かく歓迎してくれたと聞く。「神戸からの転校ということで、特別扱いはしないでください。学校が通常になるまでの学習の遅れを考慮しての仮転校ですので」電話で転校先の教頭先生にお願いしたものの、国語の作文発表や文集などで地震のことについてのことを発表するようにと先生



から言われたと聞く。私は避難所を出て、マンションに戻った。部屋の片付にマンション自治会では、各戸玄関ドアの施錠や救援物資の受け取りと各配責任者の決定、ライフラインの復旧の見込みなどが話された。何よりも仕事である学校のことが最重要問題といえる。避難所にいたためか、私自身風邪気味で空気の悪さもありセキがとまらず、カラセキが続き、体調不良であった。「ともかく、無理をせずに、やらねばならない課題をしっかりとやっていくしかない。あせらずじっくりと取り組み、時間がたてばいい結果がでるもの」と自分の課題に対し言い聞かせた。そこには、焦りや憤りも不安もなく、ごく自然にそう思えたことがうれしかった。職場の同僚の顔がとてもなつかしく思えた。

防災教育と『心のケア』

阪神大震災は教育にも甚大な影響を及ぼし、震災からの復興とその経験をいかに教育現場で生かせるかが最大課題といえる。自然の威力に対し畏敬の念を育てねばならない。被災との不自由な生活の中で、自らの皮膚感覚を通じて学びとった水や食料の有り難さ、助け合い共に生きることの大切さや家族のきずなについて考えてみることも防災教育のポイントといえる。被災によって生じたマイナスをまずゼロにするのではなく、むしろプラスに転化させようとの姿勢が基本である。何よりも大切な教訓のひとつは「人の生き方に学ぶ」ことであり、「いのち」を教育の基盤に据えることで、イジメ、不登校などの諸問題に対しても「いのち」の大切さを教えることでその解決の糸口となり、内面理解できうと考えられる。本校教育の震災復興は、学校長の本年度も例年通り学校行事を実施するとの方針に従い、3年生は5月に修学旅行で北海道の大自然を満喫した。“被災地からようこそ”との言葉と共に、各ホテルや見学地で温かく歓迎された。ホテルロビーでの花束やセレモニーに記念品などのプレゼントだけでなく、地元の新聞・テレビ局の取材にただ感謝するのみであった。そのような温かい歓迎のなかであって中央バスのガイドさん達12名は「生徒さんたちは震災でつらい思いをしているはず、震災のことは触れずにおこう」と事前ミーティングで共通理解されたと聞いた。「がんばって下さい」「がんばろう」の言葉をよく耳にする。しかし本当にがんばらねばやっていけない人達にとって、励ましの言葉は時とし重荷となり、つらく感じることもある。「無理をしないで」の言葉かけこそ必要ではないかと思う。よく言われる『心のケア』とは、このようなガイドさんの配慮や「無理をしないで」の言葉かけの精神に真実があるように思われる。学校全体が常に安心感を与えられ、「心の通う学校運営」がスムーズにいくための「カウンセリングマインド」がより一層重要視されるであろう。

おわりに

神戸医大附属病院の塩山晃彦氏は、被災後の子供の精神状態と精神的な支援の具体化について『被害を受けることで子供達はストレスをおこし、その反応として①恐怖（直接はいつてくる）②喪失（大切なものを失う）③生活のストレス（住むところを失う）などから起こってくる。日常生活におけるストレスとして①人のために何かしたいが出来ない②急に思い出し、イライラし悲しくなっ

てくる③回避する（何かから逃れたい）④怒り（悲しみとして処理できず怒りの情況）となる』と報告されている。ストレスの起こりうる現象を充分把握し、子供を観察しながら『心のケア』に努めるためには教員の力量が必要であろう。「いのち」の大切さを身をもって学びはしたものの、一人ひとりの持つ価値観も当然変化したのではないか。特に多感期の子供達は、大人社会を冷静に判断し評価しているであろう。そして大人のエゴや身勝手さを受けとめているであろう。そのような子供達が、何年後かに本校に入学してくることは確実である。それとともに信頼と尊敬が基礎となる教育現場において、より一層教師の責務が重要となってくることもまた確実である。



震災の記録

教 諭 太 田 徳 明

こんな事になるなんていったい誰が予想できたであろう。港町神戸、モダンで美しい街並、その風景は、一瞬のうちにがれきの山に姿をかえてしまった。

平成7年1月17日午前5時46分、激しい揺れと食器が割れるすさまじい音で跳び起きた。しかし幸いにも家屋には被害はなく、周囲も落ち着いている様子であった。私は通常通り出勤の準備をし車で学校へ向かった。垂水から国道2号線の塩屋駅付近に出るまでは、いつもと何ら変わらない様子であったが、そこからしばらく車を進め、初めて事の重大さを知った。道の両側で家屋が倒壊し、昨日までの光景とは一変していた。新長田に近づくにつれて倒壊した家屋も多くなり、校舎の事が気になりだした。

普段とほぼ同じ時刻に学校に到着し、外から校舎を見たが、被害があるようには見えず、ひと安心した。しかし校舎に一步足を踏み入れ、言葉を失った。あわてて校庭に出てみると、すでに校長先生はじめ数人の先生方が、来られていた。皆、悲痛な思いで、三階建てになった校舎を眺めた。

校長先生の指示により、長田校舎に残る者、第二グラウンドの被害状況を確認する者、六甲アイランドの夢の星幼稚園に行く者へと分かれ、すみやかに行動に移った。私は、校長先生と夢の星幼稚園の被害状況の確認に行くことを命ぜられ、渋滞の中を六甲アイランドへ向かった。そこで私が見た光景は、私の知っている神戸ではなかった。道路には、亀裂がはいり大きな陥没が見られた。高架は地面すれすれの所まで落下し、橋げたも崩れ落ち、その横には崩壊したビルがいくつも続いていた。渋滞を逃れようにも逃れられず、50cm程の段差ができた道に板を敷いて通り抜けたり、時

には歩道を通ることさえあった。なんとかして六甲アイランドには到着したが、そこは液状化現象により、道路一面が泥沼であった。

やっとの思いで夢の星幼稚園に着き、校長先生と園舎の隅から隅まで点検した。所々で壁がはがれ落ちたり、ひびがはっていたりはしたが、比較的小さな被害ですんでいるようであった。点検が済むと、渋滞の中を再び長田校舎へと向かった。

新長田が近づいてくると、あちらこちらで黒煙が上がっていた。車を止め、校庭に出てみると、激しい炎が特別教室棟のすぐ南側まで迫り、壁を真っ黒に焦がしていた。今にも、新館に火が移りそうな状況の中、来校の職員は、南側の階段に積み重ねていたダンボール箱などの燃えやすい物を、必死の思いで取り除いた。炎はどんどん勢いを増し、西側の民家にまで広がってきた。取り出せるバケツをすべて取り出し、住民と職員は一列になってバケツリレーで消火にあたったが、炎の勢いを止めることはできなかった。水もない、消防車も来ない中、すべてを燃やし尽くすまで、ただ茫然と立ちすくむだけだった。



翌日、まだ自宅は停電していた。携帯用ラジオの電源を入れ、何げなく聞いていた。そこで私は自分の耳を疑った。ラジオでは、震災で亡くなられた人々の氏名を読みあげていた。聞き覚えのある、私の受け持つ一人の生徒の名が読みあげられた。その瞬間身体全体から血の気が引き、夢であってほしい、間違いであってほしいと心の中で何度も繰り返しながら、家を飛び出した。1、2年時の担任である清水先生に協力を願い、確認に走った。彼女の自宅のある、長田区水笠通りでは、ほとんどの家屋が倒壊していた。夢であってほしい、間違いであってほしいと、祈る思いで彼女の家の前に立ちがく然とした。そこには、一階が押しつぶされ、二階が崩れるように覆いかぶさっている家屋があった。それでもまだ信じたくはなかった。近所の人と話すことができ、震災が起きてからそれまでの悲惨な様子を一部始終聞いた。その話の中で彼女の死が事実である事を認めざるを得なかった。清水先生と私は、全く言葉を失った。これ程まで、やりきれない悲痛な思いをしたのは初めてであり、二度と味わいたくない思いであった。

この震災により、多くを失いそして多くを知った。天災の恐しさ、命の尊さ、人と人とのふれあいの大切さなどをあらためて痛感した。この経験を決して忘れる事なく、次の世代へ伝えていきたい。



地震にあって

教諭 十河素子

地震、いつもの揺れより大きいな。少し間をおいて再度揺れる。主人が早朝出張したため、家では一人でした。二回目揺れた時、少し怖くて頭より布団をかぶりました。明るくなり家の中、周辺を見るまではこんなに被害が大きいとは思いませんでした。主人も六甲ライナーが止まり、手に少し傷をして帰ってきました。一人でなく家族がいてよかったと思いました。

地震の次の日、LPガスによる避難勧告が出され、国道2号線より北へ逃げました。本山にある小学校にしばらくいたのですが飲料水、救援物資は来ず、線路を見ると何人もの人が歩いていました。主人が、「とにかく甲子園まで歩こう」と言いました。甲子園からは電車が動いていました。リュックを背負い、主人とはぐれないように歩きました。戦争の時ってこんな状態だったのかなと思ったりしました。

幸いなことに、我が家は裏の空き家がブロック塀とともに倒れてきたのですが、なんとか修理すれば住めるとのことでした。壊れた食器類は片づけ、食事する部屋と寝室は確保しましたが、とても掃除をする気にはなりません。電気はついたものの水は出ない、ガスはない、どうして生活していけばよいのか途方にくれました。主人が言うのには、住める家があってよかったじゃないか、仕事をもっているのだから職場へ行かなくてとはと。

学校へ行くのにどうして行こうかと思いました。東へは何とか電車が動きだしましたが、西方向へは復旧のメドもなかなか立たない状況でした。職場より避難所まわりをする時、幸いにも家の近くでした。西方面の先生方は、東灘の被害の大きさに驚かされたようでした。神戸商船大へ行った時、広島大より教授や学生がボランティアとして炊き出しに来てくれていました。我々もごちそうになり本当に身も心も暖まり嬉しかったです。

道路、鉄道がズタズタになり、学校へ行くのにどうして行こうかと思いました。最初は自転車。学校へ車で行かれる先生にお願いした時もありました。その後、阪神電車が元町ー高速神戸間で動き出し、JR



も神戸より西へ通じたので、鷹取から板宿まで歩き、地下鉄で妙法寺まで。その後、阪神、阪急、JR、地下鉄が少しずつですが復旧しはじめ、代替バスに乗ることなく徒歩と電車の乗り継ぎで何とか学校へ通いました。時間も少しずつ短縮され、二時間足らずとなった時には本当に嬉しく思いました。また、入試のお手伝いの時は、尼崎勤務にいただき、自宅より阪神電車一本で通うことができた本当にありがたかったです。

いままで何不自由なく暮らしていたため、電気ガス、水道がストップし、家がメチャクチャになった時は、本当にこれからどうなるのだろうと情けなく、どうして地震がと思いました。近くの魚崎小学校へ水をもらいに行った時に手伝ってくれた見知らぬ人の親切が忘れられないです。また、ガス工事、道路整備、その他のために全国各地より神戸市に来て下さった方々。

今では、家の修理もほぼ終わり、以前の生活にもどっていますが、家の周辺、小学校を見るとたくさんの爪跡が残っています。今日に至るまで、校長先生はじめ職場の先生方の暖かさに感謝し、この地震をいつまでも忘れないように記憶にとめておきたいと思っています。



忘れてはならない「あの日」

教諭 宮野宣康

第2土曜日の休業日による連休明けの火曜日、「さあ、そろそろ起きな、今週も頑張るぞ」と思った途端です。「ドン」と床下から突き上げられるような衝撃を受けました。続いて起こった例えようのない揺れ、「地震や」と怒鳴ると同時に、2階に寝ていた子供たちを助けに階段を駆けあがりました。薄暗がりのなか、家具と本に埋まってしまった子供たちを無我夢中になって引きずり出して外に飛び出しました。この間、どれほどの時間が経っていたのか、ほんの一瞬だったとも感じられ、逆に相当地に長い時間だったとも思われ、今、思い起こしてみてもはっきりしないことが多いです。でも、ただ必死になりながら「ああ、子供を死なせずに済んだ」という親としての安堵感だけが確固としてあったのを覚えています。

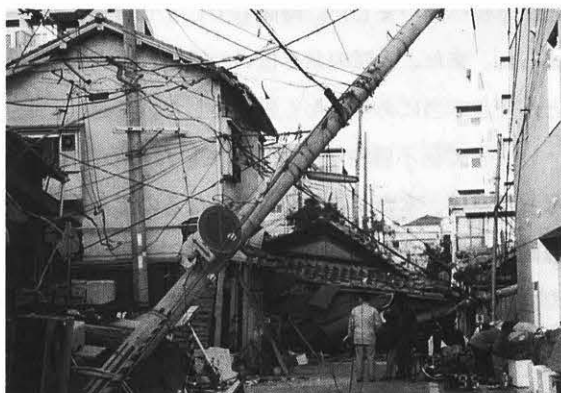
尋常な揺れではありませんでしたが、夜が明けて辺りが見え始めると、

「なんだこれは、いったいどうしたんや」

写真でしか見たことのない、戦後と同じような荒廃した風景がありました。電柱は傾き今にも倒れそうです。電線はズタズタに切れて垂れ下がっています。路上に駐車していた車の屋根に庭石が転

げ落ちています。美しかった芦屋の街は見る影もなく荒れ果てていました。もちろん、自宅のなかも冷蔵庫以外のすべての家具が倒れて足の踏み場もない有様でした。

学校のことが気にかかって仕方ありませんでしたが、テレビは壊れて情報が伝わってきません。当然電話も繋がりません。いったいどうなっているのか、どうすればいいのか思いつかないまま不安な一日が過ぎ去っていきました。



今度の震災では、交通機関の途絶と、情報及び伝達手段の混乱が苦勞した点だったかと思います。苦心慘憺して校長先生に連絡を取り、学校の被害を尋ねると「甚大な破損である」とのこと、生徒たちはどうなっているだろう、これからどうなるのだろうと、次から次と沸き起こる心配と憂いに、そして、頻繁に起こる余震にふるえながら、まざまざと自然の猛威と人間の微力を痛感させられたのは私ひとりではなかったかと思います。

クラスの生徒と直接に話しはできなくても、どうにか全員無事らしい、最後まで所在の掴めなかった生徒の避難先を確認できたときの喜びは、わが子を助け出したときにも勝る安堵感が得られました。

「よかった、よかった。お父さんもお母さんも元気か。君は怪我しなかったか……そうかどうかもなかったか。よかったな。今度先生から連絡するまで自宅待機やで。家のことや、後片付けを手伝えよ」と、

手早く同じ言葉の繰り返しでありながら、少しも飽きることがなく、一人ひとりの安否が掴めたことを大変うれしく思いました。

初めて登校して、校舎の被害状況を目にしたときの悲しみと驚きは言語を絶するものでした。慣れた神戸市街の様子にも目を覆いたくなるような思いに駆られましたが、私ども学校の被害も心を引き裂くほど酷いものでした。

国道2号線側から見る校舎はそれほどでもないのに、南北校舎の1階部分が押し潰されて、職員室は全壊していました。生徒がいる授業中だったら、こんな被害では済まないだろうと、不幸中の幸いを思いながらも、つい先日まで生徒の声で賑わっていた学校が、このように壊れてしまうなんて、自然に涙が流れました。

誰も経験したことのない事態です。どのようにして学校を再建するのか、授業再開はどうするのか、生徒たちをどのようにして登校させるのか、社会へ、地域に貢献する学校の使命は分かっているながら、このままでは「学校は潰れてしまうのではないか」と深い不安に襲われていました。不安

を紛らすために、黙々と後片付けに没頭しました。校長先生や教頭先生の苦悩を思うと、なんでもよいから取り出そう、再建に向けてできることをやろうと思わずにはおれませんでした。

幸い、本校は須磨区内に第二グラウンドを持っておりましたので、そこに仮設校舎も建ちました。三月に入るとすぐに授業が再開でき、元気な生徒たちの声も戻ってきました。

自宅待機中の動向を問うと、

「先生、元気やった。先生の家も大変だったんやてな、うちんちも壊れたけど、元気やで。」

「私は西郷小学校に避難してるんやけど、ボランティアグループのリーダーになってん。しんどいけどやりがいあるで。」

「加古川もすごく揺れたけど、ガスも水道もどうもないし、正直に言って暇で仕方なかったわ。先生、カセットコンロ持ってきたから使ってや。」

生徒たちと無事に会えた喜びは何物にも替えがたいものでした。とにかく命があってよかった。大仰な表現ではありますが、生きて会えた感激を噛みしめました。

残念ながら、本校でも生徒二人が亡くなりました。その一人は私が顧問をする、ボランティア同好会の部員でした。心根のやさしい思いやりの深い生徒だっただけに、その思い出を忘れ去るまでに相当な時間を必要としましたが、震災後、八か月が経過した今、美しい思い出を残してくれた彼女に感謝しています。そして、震災では本校自体が全壊したために被災された方々へのお世話どころではありませんでしたが、亡くなられた多くの方々に応えるためにも、また、震災後にいただいたご支援に応えるためにも、社会や地域に貢献する学校づくりと人づくりに微力を尽くしたいと思えます。

最後になりましたが、犠牲になられた方々に哀悼の誠を捧げ、歴史の生き証人の一人として、決してあの「1月17日」を忘れてはならないことを記して筆をおきます。（平成7年9月15日記）

「国語教師の見た阪神大震災」国語論叢別巻に掲載されたものを紹介させていただきました。



「制服姿の洋子に会える日まで」

保護者 城戸 美智子

「あー明日は、耐寒マラソンや」とボヤきながらも何か楽しげに、明日への登校準備をすませ、洋子は布団にもぐり込みました。何も変わらない、まったくいつもと同じ夜です。そして、あの朝

を迎えるのです。

洋子は、学校、友達大好き、みんなが、「ヨーコ。よーちゃん」と、声をかけてくれる、笑顔がいつもいっぱい明るい子です。

小学校時代、きゃしゃな洋子が、中学に入って「バレエ部に入る」と言った時、「無理ちがうん」なんて、思わず言った私の言葉に、全然耳を傾むけることなく、もう、すっかり友達との固い約束が出来ている洋子でした。

あれから3年、いろんな事があったであろう部活を一日として休むことなく頑張りました。親としても、まったく驚くべき根性です。部活の友達との絆は、本当に深く、顧問の先生の悪口？を言いつつながらも、先生との係わりは、何か温かいものを感じるのです。引退した後も、バレエ部のことを思いつつの学校生活です。そんな洋子が、やっと高校入試に本腰を入れ始めたのが、正直いって、11月に入ってからのような気がします。塾の補習にも積極的に通います。夜も机に向かいます。「城戸、頑張っとるやん」と担任の先生や、友達に言ってもらったと、うれしそうに帰ってきます。

そして、高校生活への熱い想いを語ります。キラキラ瞳を輝かせ、体中から若い希望のエネルギーが満ちあふれている姿です。そんな姿が、いつも思い出され、胸がいっぱいになってしまう私なのです。

「ドーン」あの時の一瞬の大きな揺れが、家の中をメチャクチャにし、細やかながら、大切にしていた、それなりの私達の幸せと、洋子の輝く希望を奪い去ってゆきました。

洋子は、倒れたピアノに挟まれ、頭を打ったのでしょう。意識がまったくありません。もう、頭の中が真っ白で、何が何だかわからない私です。近所の方に助けられながら、洋子を毛布に包んで引き出し、病院へと急ぎます。落ちた高架、垂れた電線に道をふさがれ、なかなか思うように進めません。燃えている家、倒れている家、目に飛び込んでくる風景は、まるで別世界なのに、私は洋子のことで頭がいっぱいで、驚くことを忘れていたように思います。

一言で言えない恐ろしい病院めぐりの末、やっと3件目の病院での先生からの宣告は、「あと12時間の命」でした。我を失なっている私達に先生は言いました。「最期まで、

子どもの頑張りを見てあげなさい。それが親としての義務だと思う。でも、若さがある。若い力はすばらしい。1%か2%の望みがある。だから希望を失わず頑張らなさい」と。私は問います。「少しの望みでもすがります。洋子のために何をしたらいいですか」「呼びかけてあげなさい」私は、「洋ちゃん、高校へ行くやろ、しっかり」と呼び続けました。「高校の制服を着せるんだから、



絶対死なせたらあかん」そんな想いが頭の中をグルグル巡ります。自呼吸のない洋子は、人工呼吸器につながれ、体中にたくさんの線を付け、ベッドの囲りには、いろんな機械が並べられます。赤や青の波形や数字、そして音。恐ろしさも忘れ、それらをじっと見据えている私でした。

辛い経験ばかりが押し寄せてきますが、看護婦さんの献身的な看護に支えられ、洋子は少しずつ死線を乗り越えてくれました。自呼吸も出来るようになってきた2月初め、地震がウソのような静かな明るい北区の病院に転院しました。退院するまでの2ヵ月半、本当にいろんな事がありました。2月8日、友から千羽鶴が届き、15才の誕生日をベッドの上で迎えました。鼻に入っていた管も取れ、やっと洋子の顔になりました。そして、体に付いていた、いろいろな管やコードが取れてゆき、食事までトイレにも行けるようになった頃、担任の先生から高校入試の電話が入りました。複雑な気持ちで、なかなか返事の出来ない私に、先生は「城戸さんの3年間の頑張りを認めてあげられるチャンスです」この「3年間の頑張りに」私の心は動きました。2年生も3年生も皆勤の洋子です。どんな事にも負けなかった洋子を認めてあげたい。そして合格通知が届けられ、洋子は「ヤッターバンザイ!!」と声にならない声で、合格通知を抱きしめていました。「洋子が、元気になったら念願の制服を着て通える高校がある」これは、私達親子にとって、震災後初めてもらった希望の光でした。

卒業式に参加できなかった洋子は、病院で主任の先生、担任の先生、そしてたくさんの看護婦さんに見守られて、校長先生から卒業証書をいただいたのでした。うれしくて、悲しくて、やっぱり胸がいっぱいになりました。

ある日、病院に電話が入りました。「洋子さんの担任の十河です」一瞬なんのことか、理解できない私です。「1年5組で、同じ烏帽子中の郡山さんがいますよ」最初から休学中の洋子に、クラスがあり、先生がいる!! 驚きと、うれしさが胸に込み上げてますます高校への想いが熱くなる私達でした。

4月末、退院した洋子は、2月半ばから始めていたリハビリに今も続けて通っています。体力は、皆が驚く程回復したものの、会話、書くことが思うように出来ないという問題に直面しています。脳は、今も未知なる世界、ゆえに、絶望もあればまた希望もありますが、本当に辛いじっと耐える忍耐の日々です。でも、「自分のクラスがあり、友がいる」ということは、リハビリする洋子にとってどれ程励みになることでしょう。

時々、心配してお電話下さる先生に、明るい返事が出来ない自分が本当に悲しかった時もありましたが、この9月やっと中野先生、十河先生にお訪ねいただき、お会い出来たことは、私達にとって大きな進歩であり、洋子の高校が本当にあることを実感として感じる一時でした。今度、お会いする時はもっと元気になってほしい!! そう願わずにはおれません。洋子にとっての希望の星“高校”は、時として、見え隠れして、私の心は揺れ動きます。とても辛い時です。でも信じたいです。制服を着た洋子が、最高のあの笑顔で校門をくぐる日が来ることを!! そして、明るく元気

いっぱいクラスメートに囲まれている洋子の姿を…。私はやっぱり思い浮かべてしまうのです。
だから、今日を頑張って生きてゆけます。

今、洋子は、たくさんのボランティアの方々に係わっていただきながら、より良い道を探りながら頑張っています。どうぞ、洋子のこと待っていてやって下さい。お願いします。

洋子!! キラキラ瞳を輝かせ、ペラペラしゃべる、いつものあなたをみんな待っています。

頑張って…

待っています。

〈1年5組の城戸洋子さん（現在休学中）のお母さんです〉